

なら燈花会能

平成三十年 八月十一日(土)

おいて 奈良春日野国際フォーラム

薨(I・R・A・K・A)

(旧奈良県新公会堂)

能

定家

櫻間 右陣

森 常好
森 常太郎

石井 保彦
荒木 建作

杉 市和

間

茂山 茂

伊藤 真也
金春 穂高
中谷 厚行

本田 陽康
徳田 彰
多田 晃英
寺村 修

佐藤 俊之
石原 昌和
長谷猪一郎
辻本 實

仕舞

鐘之段
殺生石

塩谷 恵
山下あさの

角田 尚香
山崎美紗子
久田三津子

清 経
松 風
松 虫

佐野 和之
観世 芳伸
生一 知哉

三木 成弘
久保信一朗
久田 勘鷗
山崎 浩之

狂言

口真似

茂山あきら

茂山 童司
丸石やすし

増田 浩紀

石橋

瀬戸 洋子

山中 雅志

福王 和幸

森山 泰幸
久田舜一郎

上田 慎也
藤田 次郎

間

大獅子

小笠原 匡

久田三津子
久田 勘鷗
塩谷 恵

大久保勝人
三木 成弘
山崎 浩之
佐野 和之

山崎美紗子
生一 知哉
親世 芳伸
久保信一朗

主催

奈良能
金櫻会

定家(ていか)

都一見の僧が千本あたりで夕景色を眺めていると、にわかには時雨が降り、かたわらにある由緒ありげな亭に立ち寄る。そこに一人の女が現れ、これは藤原定家卿が建てた時雨の亭であると語り定家の歌を口ずさみ亡き世に残る跡を懐かしみ、さらに式子内親王の墓に案内する。内親王と定家の忍ぶ恋の物語り、内親王の死後定家の執心葛となって墓に纏わり付き互いの苦しみ離れず救いを求め消えて行く。僧の読誦する薬草製品の功德で定家葛の呪縛が解け、内親王は老女の姿で現れ報謝の舞を舞い墓に消えたと見るやまた定家葛は元の如くに墓に纏わり付いてしまう。しどころ多く型・謡ともに習いの多い大曲。

口真似(くちまね)

銘酒を一樽貫った主人、心安い人と飲みたいものと思ひ、太郎冠者を呼び出し相談すると私ほど心安い者はないと言うのだが、そうではなくて「御酒を参るようで参らいで、又参らぬかと思えばフト参るような面白い人」を呼んでくるように言い付ける。お酒の上がとて面白い方を呼んできたと言う人を見て主人は驚いた。一杯呑めば一寸抜き、二杯呑めば二寸抜くような恐ろしく酒癖の悪い男、追いつ返せとは言ったものの、太郎冠者にとめられ仕方なく振舞って帰すことにする。粗相があつては困ると、主人の言うようするよう口真似をするように言い付けて座敷に入る。言い付けられた通りにする太郎冠者、さてさてさてその結末は。

石橋(しゃつきょう) 大獅子

この曲は大抵の場合、半能として後半だけ舞われ、今回のように前後を通して舞われることは稀である。入唐した寂照法師が清涼山に来て目前にある石橋を渡ろうと詳しく橋について尋ねようと人の来るのを待っていると、一人の童子が現れる。向かいは文殊菩薩の浄土清涼山よくよく拝むようにと言ひ、石橋を渡ろうとする法師に、並大抵の修行では渡る事の出来ない橋であると戒める。この橋は千丈余の谷に巾一尺足らず、表面は滑らかな苔に覆われ、長さ三丈余、人間が渡した橋ではなく自然に出現したものだと言ひ、やがて影向の時が来ると述べて姿を消す。文殊菩薩の使獸の獅子が現れ、牡丹の花に戯れ舞い遊び御世を祝福して千秋万歳と舞納める。